

## 命と向き合う仕事だからこそ

理学療法、介護福祉、保育、医薬品販売のそれぞれの現場で働いていくための、専門的な知識と技術を身につけさせることが、専門学校である本校の基本的な役割です。いずれの現場でも、向き合うのは人の命です。知識や経験の不足による判断ミス、技術が未熟であることによる失敗が、基本的にあつてはならない仕事。それが、学生たちがこれから就こうとしている職業です。

そのため本校は、専門科目の学習において、「知識の取得（講義）→実践（演習・実習）→振り返り（演習）」のサイクルを繰り返すことを意識しています。知識が、現場で実際に活用できるものとして定着しているかどうかを、このサイクルによって確認していくことができるからです。また、「振り返り」のプロセスには、就職したあとに、経験を次に活かすことで常により良い対応を追求し続ける、という習慣を身につけてほしい、という意図も込められています。

## 「知識」と「技術」を組み合わせる力

さらに本校は、学んだりおぼえたりした「知識と知識」「知識と技術」を組み合わせ、体系化させることで、状況に合わせて最もふさわしい対応を選び取って実施する力を、とても重視しています。健康をさまたげる症状や、生活していく上での問題など、学生たちが現場で向き合う課題の多くは、単一的な要因から生まれてい

## 大切にしていること ——現場主義・実践主義

る問題ではありません。また、課題を解消するための方法も、ひとつではありません。向き合う相手の数だけ、提示するケアの種類があり、導くべき方向があります。そのために、持っている知識と技術とを使う力が必要です。

## 現場を意識させる工夫

本校では、各学科の教員の多くが、プロとして現場で働いた豊富な経験を持っています。このうち理学療法学科では、教員の大部分が、学生たちの指導のかたわらで、現役の理学療法士として仕事をしています。そうした教員の指導を受けることで、学生たちは、教員を通して現場のいまを見つめることができます。授業のなかで教員たちは、意図的に現場の話題を持ち出し、現場の様子をリアルに描くことができるように配慮します。

また、演習では対象者の置かれた状況を最大限詳細に設定し、対象者の背景・心の中・周囲の人々の存在を意識できるよう工夫しています。そうした指導を通して、学生たちは、蓄積させるための知識ではなく、役立てるための知識をつけなければいけないと強く意識するようになっていきます。

さらに、校内で演習を行う際に、挨拶や言葉遣いを徹底させることにも、現場だったらどう振る舞うべきか、を考えさせる意図があります。このことは同時に、礼儀作法が礼儀のためではなく、思いを相手に伝えるための形であることを、学生たちに伝えています。

理学療法学科の授業。入学後、学生たちはまず、人の身体の仕組みを徹底的に学びます。この段階から、現場を見据え、現場を意識しながら学習しています。



実習に多くの時間を割いているのが、本校カリキュラムの特色のひとつです。理学療法学科は、資格取得のための規定である810時間よりも2割以上多い「990時間」を確保しています。また、介護福祉学科は、2年間で450時間の実習以外に、見学やボランティアなどで現場に足を運ぶ機会を多く持ちます。リトミック保育学科は、8週間の実習以外に、リトミックや絵本の読み聞かせを行うため、地域の公立保育所をたびたび訪れています。さらに、「大きな器づくり」をコンセプトに保育を行う姉妹施設「岡本ハーベスト保育園」の存在があることで、季節の行事のたびに同園の子どもたちと交流したり、同園園長の講話を聴いたりする経験を、数多く持つことができています。また医薬健康学科では、薬局やドラッグストアでのアルバイトを通じた実習を行うため、1年生の後期から、きわめて長い時間を現場で過ごすことになります。



## 進化を続ける業界で

専門知識と技術を身につけさせるという基本的な役割と、就職後に「成長し続けること」「現場のあるべき姿を問い続けること」への意志を持った人間を育てることを軸に、本校は「現場主義・実践主義」の徹底を図っています。

4学科の先にあるそれぞれの現場は、常に、時代のニーズに合わせて変化し、進化することを求められています。医療福祉のサービスを必要とする人々の置かれている状況は、めまぐるしく動く社会情勢と密接に関わり合っています。また、「最新の技術」が最新である時間は短く、新しい発想や考え方も日々生まれてきます。であれば、そこで働く人間が、活躍し続けていくためには、自身が成長を続けていくことが欠かせません。

## 将来像を描く機会

本校には、プロとして働いた経験を持つ教員が多いことで、学生たちは、身近に「あんなふうになりたい」という目標・憧れる像を見つけ、自分の将来像を明確に描くこともできているようです。共に学ぶ同級生としての夜間学生や職業訓練生の存在も、少なくない影響を与えています。

さらに、卒業生や上級生が参加して行う演習・OSC E（客観的臨床試験）・国家試験対策授業・施設見学などの体験も、「前に行く誰か」に自らの将来像を重ねる経験を、学生たちに数多く届けることができているようです。

## あるべき姿を模索する姿勢

本校は、4学科すべての学生たちに、卒業後、ただ現場の一員としての働きを提供するだけでなく、現在の医療福祉が抱える問題は何か、未来の医療福祉はどうあるべきか、ということを模索する姿勢を持つてほしいと思っています。また、就職したそれぞれの環境のなかで、周囲と協力しながら、「今日よりもっと良い対応を実践できる明日」を探すことのできる人間であってほしいとも願っています。

本校や姉妹校の教員、姉妹施設の保育士のほか、外部講師を招いて話を聞く機会を数多く経験することで、学生たちは、医療福祉の視点から、社会を見渡すことがで

きます。そして、その社会の一端を担う存在としての理学療法・介護福祉・保育・医薬品販売の仕事と、そこで働く将来の自分とを意識します。

一方で、講義、演習、学校行事を含めたレクリエーションの機会に、チームやグループで行動する機会を多く設けています。人は人と行動を共にし、共に課題に向き合う際に、自分自身に与えられた役割を意識します。また、自分にこそ担うことのできる役割を探そうとします。そのことが、現場で周囲と協調しながら最大限の成果を生み出していくとすると姿勢を育むと考えています。

学生たちは、それぞれの現場で働き始めてから、時につまずいたり悩んだりしながら、試行錯誤を重ね成長を続けていくことになるでしょう。時に、失敗することもあるかもしれません。それでも医療福祉の領域の仕事において、「最初は失敗してもいい」「二度繰り返し返さなければいい」という考え方は、基本的にはあってはならないと思っています。

だから本校は、学校生活のすべてにおいて、常に現場を念頭に置き、実践を意識しながら知識と技術を学ぶ環境づくりに、力を注ぎたいと考えているのです。